
雪の結晶

さい

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の結晶

【Nコード】

N5657B

【作者名】

さい

【あらすじ】

遊びや。勉強。部活。恋愛など幸せに満ち溢れている青春。それに希望を持っていた三人はある事件により歯車を狂わされ、苦悩の日々を送る

プロローグ（前書き）

構想はなんとなく、頭の中にありますが。実際どんなものができるのかは自分でもわかりません。無論、荒唐無稽になる危険性があります。一応、無理は禁物です。あと、趣味程度でやるので連載ペー
スは未定ってことで ごめんなさい。

プロローグ

人の一生とは地球の歴史からみればどれ程短いものなのか、何を成しえ何が夢半ばに潰えるの

か、それは人の持つて生まれた天性のものであり、決められた定めにより人々は生きており、人の縁はその定めの子により紡ぎだされた布切れの様な物である、自分はそう考えている。

だが、その布切れは常に鮮やかな物であると信じていたかった。

誰よりも、この自分と皆と一緒に紡ぎだす世界にひとつしかないこの布切れを、私は宝物として大切に箱の中にしまっておく。そして辛いときや悲しいときにそれを箱からとりだして、時は自分を慰める事に、時には自分を元氣付ける事に、この世界にひとつだけのちっぽけなものに心を頼らせる。それは心地よく、一生大切にしたいと感じていた。

そして、守つていこうと。それは、たとえ許されざる行為であつてもかまわない、私はそう心に決めていた。

「歯車を狂わした罰か・・・」

病床に横たわる自分は目を閉じた。不思議と死の恐怖は感じない、それはまるで自分の犯した罪を自らの死を持つて贖罪する、その覚悟はとうに持つてはいた。

それは、ずっと前から。そう、あの時背を向けて二人の前から去つた時から、

（あの時も、雪の季節だったな・・・）

私は、そう思いながら目を開け暗い空を見上げた。漆黒の闇から生み出される冷たいけどなぜか暖かいもの、雪。それは何よりも変えがたい美しいものを感じた。

そして、まだ少し、懺悔する時間が取り残されていたのを感謝した。

カリスマ性がある人間は、ある意味宿命の線路を歩いているのかもしれない。

ある程度決められた道を歩き、決められた言葉を周りが期待している。まるで人間の根本にその人物像が有るかのごとくである。

実際その本人はそれを故意にやっているかどうかはわからない、もしかしたら先天性なのかもしれない、生まれながらに人の上に立つのを定められたのである。まあ、自分自身に置き換えると肩の凝りそうな話なのは確かだが。

「眠そうに、美女の観察か？」

前の席の小塚 武が声をかけてきた。

今眺めているのは、同じクラスの小川 あかねである、クラスメイトと楽しく談話していた。容姿端麗で見るものすべての目を凝視させるような魅力がそこにあった。カリスマ性を持つ話は、あかねの事だ。

「そうか？ そんなつもりはないんだが」

「いや、目で追っているのみえみえだぞ。俺もそうだし」

武は今でも小躍りしそうに話した。自分にはその意図がわからない。

「それだったら、告白すればいいだろ？」

中学三年はもうそろそろ終わりである。今は、正月過ぎた二月だ。恋人たちのイベントもそろそろだし、告白するには頃合のはずだが。「俺には、恐れ多くてそんなことは出来ない。それに振られたときのショックで寝込むと考えると」

そうかい、そんなの怖くては、何も行動はできないはずだが、やる前から失敗を恐れてはチャンスをものにできないものと説教したい。

「それに告白して失敗すると、彼女とシコリがのこる気輕に話しかけられなくなる、そうなるなら現状維持が一番、違うか？」

そう訊ねられても、自分は困る。

「だがな、武、もしあかねが誰かに告白されたら、お前は どうするつもりだ？ まさか、身をもつて、止めに入るわけじゃないだろうな」

武は少し考えた。その間二秒ほどである。

「おいおい、非常識なことをするわけないだろ」

するわけないだろうって、その二秒の間を訪ねてみたい。きっと少しは考えたのであろう。たぶん。

「じゃあ、お前の野望もそこまでの話だ。男なら強引に引きつけて押し倒すくらいの度胸がないと、奇麗事だと女性は付いていかないと思うぞ」

自分は少々茶化すつもりで言った。ある意味そういう煮え切らないのは好きじゃない。相手に見合わないといって、何も進まなきゃ始まらないのだ。残念に終わったたら終わったでもその結果もきっと本人にとってはプラスに働く、自分はそう思っている。

「できつか、そんなこと」

この返しは、きつと武の煮え切らない態度の表れだろう。自分の目からみて武は結構いい男の分類に入る。押し倒すまでは犯罪になつても、本気でキスを迫るならきつと許してくれる女性は多々いるだろう、その割合は四割と考えてもいい。

（もったいないな、きつとあかねじゃなければ上手く行っていたのかもしれないな）

そう思わず得なかった。上手くいかない恋は人の人生を狂わせ不幸にするそんなところだろう。

なんとなく、不器用さが無ければと言う印象が、武には付いてきている。

二人で、それらの談義に集中していると、思わぬところから影がさしてきた。噂をすればと言うやつかもしれない。

「和馬と小塚くん、卒業旅行どこに行くかアンケート書いた？」

優しい声だったが、ふと、その声が天から降ってきたような感じで正直自分は驚いた表情になった。今現在自分らの話の中心人物が話しかけてきたのである。話を聞かれた自分はそう思った。

「なあ、今の話し聞こえていたか？」

自分のその問いに、あかねはキョトンとした表情で自分らを見つめていた、武は聞こえていたと思ったのか表情が固まったままである、目の前の話の主役は軽く首を振った。

「うつん、なんの話していたの？」

聞こえてなかったのか、この返しで自分はそう思った。そうしたのなら墓穴を掘った。あかねは答えを求める目でこつちをみた

「いや、まあ、なんでもない、気にするな」

普通の話し声で話したので、聞こえたと思ったのだが。自分は前の方を見た、武は相変わらず固まっている。

（こんな事で目の前の女性に自分の本心を伝わったなら、狼狽するのは当然か）

「ねえ、あたしのこと？」

本当は聞こえていたんじゃないだろうな、そのような問いである。「違う、まあ女の前では言えない話だ、わかるだろう」

何も考えずに、この言葉を発したが、ベストな言い訳だ。思春期の男が話し合うネタには女子禁制のものは星の数ほどあるのだ。まあ、逆もしかり。

「そう、いやらしい話ね」

あかねは、なんとなく笑っており、こんな所でそんな話をするかというバカさ加減と、親しみを持った目で二人を見ていた、軽蔑色は感じられない。

「まあ、公衆の場でそういう事はやめておいたほうがいいと思うけどね、あたしならともかくほかの人ならどう思うか」

災難は去ったようだ。そしてオマケに説教された。だが、それだけで済んだ様で武も安堵の表情を浮かべている。

「ところで、さあ、さあ。早くアンケート、あとは二人だけなんだから」

アンケートねっと思ったら、前の武と目を合わせた。二人とはうちの事だろう。さて、どこに行方不明になったのか、そう思い机の中を見た。学校のプリント類は必要なだけ持って帰るが、自己記入のやつだけ学校に置いておく。いちいち持って帰って持ってくるのが面倒なのである。机の中を見ると、一枚だけそれがあった。

思春期 二月（学校） 2

卒業旅行、行き先希望アンケート

と言う、女の子が書くような可愛いイラスト入りプリントである。中央には希望場所と大きな囲いがあり。下の方に書いてあることは二月二十三日（土）に決行予定、と書いてあった。

雨の日だと先延ばしになるのだろう。

武も、自分と同じく机の中に入れていたのかすぐに見つけたようで、プリントをもって後ろの自分の方を向いた。

「実際、いまのところは何に決まりそうですか？」

武は、自分とは違う口調であかねに話しかけた。その話し振りからして、パーソナルゾーンに立ち入れない躊躇いらしきものを感じる。

「とりあえず、第一候補は遊園地かな」

中学の学内でやる範囲はそんなものだろう。仲のいい人たちは泊りがけの旅行も計画するかもしれないがいい筋である。

「時点に、北海道旅行や、沖縄旅行などそういう案もあるけど、ま、無理でしょ」

そんな事書いても採用しないよという念押しに感じた。

「なあ、遊園地を書けて遠まわしに言っているようなものではないか」

「そうなるね、必然的に」

あかねはそこで笑みをこぼした。

「民主主義の世の中で、そんなことを笑顔で言われてもな」

自分は、そう言いながら、印刷された紙をあかねに突き出した。

決まっているならどうにでもしろ、という事である。

「だからこそ、選挙つてものが必要でしょ、それに選挙に参加しない人が国政を文句言う資格がないと同じ事で、後々いちゃもんつけ

られても困るって事もあるから意見を集めているのよ」

そういいながら、自分が差し出したプリントを押し返した。

ふとこう言つめんどくさい事は、勝手に決めてくれという願いもあった。

それにこの国は大切なことは国が秘密裏に裏で決めており表面化したと思つたら議論を交わす前に強行採決で可決してしまふ国だ。そんな謀り事ばかりの一国に、わざわざ地方中学校の決め事ぐらい遵守することはないのに、そう思つたが反論する気にはならなかった。武は、自分とあかねのやり取りを見つめていた。こういう時ほどうまい一言を言えば溶け入ることができると、自分はなんとなく、彼の唯一の弱点をあげるとこの不器用さかなとふと頭の中に過ぎった。

自分は、諦めの表情で息を吐くように言った。

「じゃあ、遊園地と書けばいいのですね、お姉さん」

組織票を集める支援団体が一票をとりつけたときの如く、声のトーンや元気いっぱいの笑顔を見せて

「こそ、お願いね」

と言つた。すこしわからないような溜息が無意識に出る。自分はその頼みを聞くと、机の中から筆箱を取りシャーペンを取り出した。武もそれを見て、筆記用具を取り出そうと正面向こうとしたが自分が制止した。

「武、ほらっ」

二本あるシャーペンのもう一本を渡した。武はそれを受け取つて「サンキューっ」と

と言い、ペンを走らした。もちろん書くことは遊園地である。自分もそれに倣つた。海外旅行『ハワイ』と書いた時点でこいつに引つ叩かれるだろうなと思ひながら。

（確か、憲法に表現の自由という項目があつたはずなのだが・・・）

思春期 二月（学校） 3

はい、ありがとう、二十三日土曜、楽しみにしててね」

そう言いながら、自分や武が書いたプリントをなぜか勝ち誇った感じで眺めていた。

「まあ、楽しみにしてない程度に楽しみにしておくよ」

実際のところ自分の本音である。目の前の親友に目をやった。彼はあかねがこの場に着てから借りてきた猫のように大人しい。

（遠慮することはないのにな）

自分はそうあかねと今まで接してきた。

無論腐れ縁ではない、あかねと始めて会ったのは中学生になった時である、小学校は別々の学校であった。武とは小学校からであるが、あかねとはそれまで存在さえ知らない他人であったのだ。出会った切っ掛けを話さなくてはならないとすれば、二年の他愛もない自分の教科書の忘れ物からである。三年になって武とはおなじクラスになったのだが、一年に二年と別々のクラスであり。

次の時限に行われる英語の教科書を忘れた自分は、武に英語の教科書を借りようとして教室に行ったのはいいけどその時、職員室へ呼び出しが何かで不在であった。

その時、取次ぎをしてくれたのは、小川 あかねでだったのだ。困った表情をしていた自分を見て「なんなら、あたしの貸してあげるね」と言われ、自分はその行為に甘えた。切っ掛けといえそんなものだ。そこから学校で偶然ばったり出会ったら少し話す程度になったのだが。

武が彼女に好意を持っていたのは後ほど知ったことで、その時自分は「気軽に話しかけてみるよ」と囁けたが「どうも高嶺の花で話しかけづらい、そんな雰囲気を感じる」とすんなり返された。

そんな物なのかね、武士じゃないのだから手合わせする前に相手の力を読んでも仕方がないのに、とつくづく思う。彼を知り己を知

ればは、孫子の学問だ、思春期の中学生にその学問はまだ必要ない。確かによくよく見れば容姿端麗で後ろから後光を刺した感触は感じるが、自分はそんなことどうとも思わない、どこにでもいる普通の女性にしか思えない。お前の趣味ではないからだと言われればそれは否定する。自分の理想の女性像そのままであるが、人様が騒ぐほどではないと断言できる、ましてや美人がいると言っことで隣町から見物に来るほどであるがそんなことやっている暇があるなら学問に精をだせばきつといい結果を得られるのと思いながらも静観してしまうのが自分だ。まあ、天邪鬼と言えばそれに当たるが、

「ところで、あかね」

「ん、なに？」

立ち去ろうとしていた所を呼び止められたためなのか、彼女は少し気の抜けた表情になっていた

「あかねは、高校は部活とか入るのか？」

あかねは少し考えるポーズをとりながら、

「うーん。どうだろ、もしかしたら向こうで友達とかできたら、その子に連れられては入るかもしれないけど、ほら、こちらが進むのって超進学校じゃん、大学受験とか厳しい高校だと思うのね、だから今のところは決めてないって所かな」

そして、返したように自分達に尋ねてきた。

「和馬と小塚君は、どうするか決まっている？」

「今のところは考えてない、まあ、たぶん帰宅部だと思うけど」

「俺も、和馬と同じだと思う」

それを聞いた、あかねはなぜか表情を崩して。

「そっかあ」と言い、そして次へつなげた。

「それよりも、二人とも、仲いいのね、なんか羨ましいな。ほら腐れ縁というのかな、小学校、中学校、そして高校も同じ学校になるし、それに比べてあたしなんて次は誰もいなくて」

今回の進学で、あかねは仲のいいグループから外れることになる。県内でトップに入る学校へ進学するからだ。かなりの人気高でもあ

り志願者は十数人いたが結局合格をもらったのは、あかねと自分、そして武の三人だけであった。合格者の殆どが私学校であるから。合格者が三人も出した公立のうちの学校は大健闘し、勲章ものの部類に入る働きだろう。

「ちよつと、待って、あかね。どうせおなじ地元なんだから、中学の友達とも遊べると思うぞ。それに高校生になったらたくさんの友人もできる、違うか？」

あかねはゆっくり首を振った。

「ううん、卒業したらきつとミコ達とも遊ぶのは難しくなると思うの。それに高校に入っても新しい友達作るのって難しいよ、きつと」
自分は、その次言われるまでなぜそんな事を言うのかは解らなかった。

「ほら、知っている？あの高校って、医学部や国公立大学を目指す人がほとんどだって」

自分はなんも考えずに決めてしまったのだが、たしか、合格した後その話を聞いた事がある。県外各地から目指してその高校に入るくらいハイレベルな程だ。

「ああ、知っている」

「聞いた話だとね、なんか周りのみんながライバルって感じで学内がピリピリしたムードらしいの。あたし、それ聞いて少し後悔したかな、だって、折角の青春が水の泡になったばかり」

心底がっかりしたのだろう、そりゃ高校生になったのだから、勉強以外でも部活や恋に青春を謳歌してみたい。一度しかない憧れの高校生活を勉強だけという無味無臭の味気ないものに終わらせたくないという気持ちは十分理解できるのだ。

「まあ、確かに、杞憂だと願いたいな」

ふと、自分ら二人が話していると、何も声を発しない武が気になつて見た。自分らの会

話を首で追っている彼を確認できた、先ほどの饒舌はなんだったのだろうか、ふと思ってしまう。

「じゃあ、行くね」

あかねは、手を軽く上げながら行こうとすると、急に立ち止まり。「あつ、そだ。二人とも高校に行っても仲良くしてね」それを付け加えて表情を崩し笑顔を見せると後ろに振り向いた。

「おう」「もちろん」その声は聞こえてないかもしれないが、反射的に答えた。

自分自身なぜ、呼び止めたのかは解らなかった。もしかしたら、武の為と思ってやったことだと思うが、そこまで自分はめでたい人間ではないことは確かだ。しかし、目の前に居る友人は表情を表に出すことは無かったが嬉しそうである。まあ、これで良かったんだろうなと訪ねる事なく自己完結に陥った。

「そう言えば、和馬」

借りてきた猫の時間は終わったようだ、居なくなっただけで何時ものに戻った。

「ん？ どうした」

「お袋がな、今日もし和馬君が大丈夫なら夕食一緒にどうですかと言っているのだけど、今日 も大丈夫か？」

「いいのか？」

武は笑いながら、いつも自分の遠慮をあつさり否定してくれる。

「気にするなつて、お袋も親父も和馬なら大歓迎だよ、じゃあOKつて事でいいんだな」

「ああ、本当にありがとう」

本心でそう思っている。

「今日は鍋らしいぞ、ほら鍋は人多いほうが楽しいだろ」

武とおばさん達に感謝は、一生忘れてはならないだろう。自分は中学生という未成熟ながらも義理深く感じていた。

思春期 二月（教会） 1

「じゃあ、後々、家で」

放課後になり、武と別れた。このまま武の家へ一緒に転がり込んでもよかったが、そんな気分ではなかったので、適当な用を告げて後で会う約束をする。もちろん、おばさんにお礼を伝えてもらうことを忘れてはいない。

「七時に」

そついいながら手を挙げて見送った。受験は終わったから塾ではなく家にそのまま帰ったのだろう。

自分も武と逆の方向を歩き出した。決まった用は無かったが、なんとなく足は普通った場所へと進み始めた。

（高校が決まった報告はまだだったな）

自分が落ち着いてからあまり行くことはなかったが、今日は足を進めることが義務感として感じていた。

学校から十五分ほど歩くと、赤いレンガ造りの教会が目につき、小さいころ通いなれた道を思い出に浸るように歩いた。

その教会は庭が広く近くの近所の小学生の遊び場となっており、近所に公園が少ないからだろう十人ほどの子供がサッカーボールを追い掛け回していた。この頃の子供は呆れるほど元気なのである、奥のほうに目をやると黒いランドセルが積み重なるように置いてあるのが見えた。

油切れだろうが大人でも重い観音開きの大きな門扉を開け、ふと無意識に上を見上げた。屋根の上に大きな十字架が威圧的にこちらを見下ろしていると感じる、ここで信者かどうか検閲しているような雰囲気だ。

自分はキリスト教を信仰としていない、れっきとした無神論者を貫いているが、しかし、ここで自分は救われた過去があった。

（しばらくぶりだな）

受験勉強で忙しかった為に、ここにくるのは半年振りだ、しかし、その懐かしさは自分を温かく迎えてくれ、そして心地よい、それはこの主の顔を鮮明に思い出させるほどである。

門から、十数メートルに教会に似合いそうな大きな扉が自分自身を迎えてくれた。その扉の上は魅入ってしまうほどのステンドグラスが、大きなアーチ状のはめ殺しの窓に彩り良く飾ってある。

自分は習慣としてそれを見入ってから大きな扉を開けた。

中に入ると大きなホールが自分を出迎えてくれた。地元でよく結婚式とかで使われる教会だ、中はかなり広い。

扉を閉め正面を向くと、中央の壇上に黒い服の初老の男性が下を向いて本を読んでいる。子供達の出入りが多いためか、彼は扉の開け閉めでは顔を上げることはない。

左側面に飾られている時計を見た、針は三時半過ぎを刺している。迷惑でなければ、しばらくここで話し込んでも大丈夫だなと思い、もし、早く終わったら一度家に帰ろうと考えながら、その恩人のもとへ歩を進めた。

それは、どうしようもないあの日々から救い出す切っ掛けをくれた恩にやっとな自分が応える資格を持ち、それに早く伝えようとする焦りを抑えながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5657b/>

雪の結晶

2010年10月27日08時03分発行